

生涯学習施設（生涯学習センター・公民館）を巡る問題

【東京都公民館連絡協議会での話題】

○利用者数減少

- ・埼玉県深谷市では、公民館の利用率減少に伴い、施設貸出を営利目的（塾・稽古事）に広げた。

○特定の人を使う施設

- ・複数の自治体から「特定の人を使う施設」という見方をされているとの報告があった。
- ・10年前、60代が中心だったが、現在は70代が中心。10年後、20年後は・・・？

○全国的な公民館の減少傾向

- ・町田市でも、事業仕分けで文学館が「存廃も含めて検討」となった経緯あり。

⇒一般の人が生涯学習施設から離れている？

【現場の危機感】

1. 新型コロナの影響

- ・新型コロナの長期化、with コロナ、急激なデジタル化 ⇒ 集まらない社会
- ・不要不急？＝文化・スポーツ活動、生涯学習

2. 社会構造・ライフスタイルの変化

- ・経済的変化…定年延長、年金開始年齢引き上げ ⇒ 60代は学ぶ余裕がなくなった？
若者・稼働年齢層の多忙化・労働時間の不規則化
⇒ 夜間や土日祝の講座でも若者・稼働年齢層参加者は少ない。
- ・意識変化……集団活動より少人数、個人の活動を好む（例：団体旅行の衰退など）。

3. 生涯学習センター・公民館以外へのシフト

- ・民間へのシフト…カルチャーセンター、お稽古、大学等のリカレント教育
- ・他の公共施設……高齢者施設、子ども施設の充実、コミュニティセンターの整備（近場・新築・魅力ある学習・きめ細かなニーズ把握、サービス）

4. 主催講座のマンネリ化

- ・主催講座の内容は、ほぼ毎年、同様の内容が繰り返されている。
- ・社会が大きく変わっていく中、乖離が広がっている。
（世の中のニーズに答えきれていない）

5. 主催講座の変化

- ・「集客至上」から「内容重視」へ
（従来は体系に拘らず、人の集まる企画中心。現在は地域課題解決、市民参画など内容にも言及）
- ・予算上の制約による企画内容の自由度減少（やりたい企画 ⇒ やれる企画）
- ・平日日中への講座集中（市民大学の平日夜間から日中への時間帯変更。土日日中の青年学級開催）
⇒平日日中に時間のある人しか学べない
- ・学級、実行委員会、プログラム会議などの参加者、協力者の固定化
（メンバーの固定による事業内容の固定化。受講はしたいが運営には興味がない層）

検討の視点

- ①顧客を「利用者・学習者」だけに限定しない。使っていない市民、使う意思のない市民からも「不要」と思われない施設を目指す。
- ②10年後、20年後の利用者をイメージする。リピーターを集めて当座の集客を確保するのではなく、新規利用者の開拓を。
- ③誰が担うのが利用者・学習者にとって最良なのか。専門性、実施時間帯の柔軟性、公平性、行政が行う信頼感など、前例に縛られず各要素を検討。